＜前回＞：後期オリエンテーション

後期：自然神学の新しい可能性

１．言語・解釈学から聖書へ

２．聖書学の諸動向

２－１：イエス研究とクロッサン　12/10　　２－２：パウロ研究から　12/17

３．聖書学から政治思想へ

３－１：聖書と政治思想　1/7　　３－２：アガンベン　1/14　　３－３：ジジェク　1/21

Exkurs

・アガペーとエロス　　・脳科学からキリスト教思想へ

＜前回から＞

５．フェミニスト神学の挑戦：Ｒ．Ｒ．リューサーの場合

・心身二元論：身体から実体的に分離される魂　→　魂・理性（男性原理）による身体・自然の支配（女性原理）

・身体的なもの・女性的なものへの恐怖（有限性・可死性からの脱出）
→　弱者の支配・搾取による自己肯定、自己増強
↓

「反省的自己意識とは分離可能な存在論的実体ではなく、脳―身体に不可欠でそれとともに死ぬ我々の内面性の経験である。不死性は、個的意識の保持にあるのではなく、終わることなく循環する物質―エネルギーの奇蹟・神秘にある。」

フェミニスト神学的な聖書思想の脱構築と脳科学との共同？

２．聖書学の諸動向

２－１：イエス研究とクロッサン

（1）近代聖書学の成立とその諸原理

１．知・人間的現実の地平としての歴史（歴史化）→歴史主義・歴史的思惟

倫理的なあるいは宗教的な価値・理想は、歴史的な形成物(歴史的な原因と結果の連鎖の中にあり、その意味はこの連関という全体の中で規定される)である。

２．近代的知・歴史主義に基づいたキリスト教思想（研究）＝近代聖書学の成立

近代世界（近代的な日常性）へのキリスト教の適応という歴史的動向において。

・18 世紀「新しい解釈学をめぐる対決」(シュトゥールマッハー)

「正統主義はただ、十八世紀における対決を決定的な仕方で規定した、啓蒙された合理主義あるいはピエティズムという二つの運動と結び付けている所でのみの、生き延びることができた」(180)、「対決の結果は、聖書の歴史的・批判的研究をもはや長いこと回避せず、遂行して、まさにそのことによって聖書の道を指し示す声を、新たに確かなものにするということに対して備えることである。この結果に啓蒙主義とピエティズムは等しく与った。プロテスタントが自分の土台の力を信頼して、この対決を回避しなかったことは、全体としてプロテスタントが誇ってよいことである。」(181)

先駆者：ルターとカルヴァンという出発点、フラーキウス、ソツィニ派、グロティウス
トゥレティニ(1671-1737)、ヴェトシュタイン(1693-1754)、ゼムラー(1725-1791)
ベンゲル(1687-1752)

「十八世紀の新しい解釈学をめぐる論は、革新論の事実上の優勢と、革新論者と敬虔派とが共に肯定し実践した聖書の歴史的・批判的考察でもって閉じられる」(206)、「純粋に学問的なテキスト解釈が、いかに教会に役立ちもし、害を与えもするかは、テルトゥリアヌス以来すでに明白である。」(207)

・19 世紀「シュライアマハーの解釈学」「調停」

・シュトラウス(1808-1974)『イエスの生涯』(1835/36)

「イエスに関する聖書の伝承にあてはめた神話概念」は「無意識に作られる伝説という形で形成されたものと定義している」(219)

・バウル（1792-1860）とテュービンゲン学派

「シュトラウスにおいてすべての人にとって明白な仕方で始まる、批判的な歴史観とキリスト論的な教義との食い違いを、バウルはその研究によって解釈学的にも実際的にも克服した。正にこのことによって彼は後世に対して、歴史的・批判的神学はどうあるべきか、またいかに作業をする必要があるかということに対して、一つの尺度を打ち立てた。」(224)

「釈義が歴史的・批判的神学と理解されることを欲する限り、今日バウルとシュライエルマッハーより後退することはできないし、また許されもしない。」(224)

３．近代歴史学の成立→近代的知の基礎学としての歴史学

言語学、法学、哲学、神学、地質学、生物学など

・「十八世紀のいずれかの時点で、ドイツの大学、とりわけゲッティンゲン大学において、今までの単なる考証学から新しい科学的な方向、つまり、証拠となる史料の批判的検討と、出来事の成行を物語風に再構成することとを結合させるような方向に向かっての歴史学科の移行が始まった。この移行は、体系的でアカデミックな専門的研究としての歴史学の登場と密接にからみ合っていた。こうした変化と平行して、十九世紀に歴史研究が制度化されて専門的職業となってゆくにつれて、歴史家にとって一つのパラダイムが出現してきた。そして、このパラダイムが、ごく最近まで大学において執筆される歴史叙述に影響を及ぼし続けてきたのである。」（イッガース、13）

・「出来事の相互連関を把握できるような歴史学の手法を発展させようとした」(16)、「歴史学的＝文献学的方法と呼ばれることになるこの方法を使用した一つのモデル」(20)、「人間を取り扱う諸々の専門研究分野にとって解釈学的で歴史学的なアプローチの仕方が価値をもっていることを強調した」(21)。

・「「科学的」学派は、史料の批判的検討を強調したにもかかわらず、歴史研究のイデオロギー的機能を弱めることに貢献しなかったばかりか、むしろ歴史研究が内政や外交上の目的のためにますます多く利用されるのを促進さえしたということなのである」(26)、「歴史主義の解釈学的な方式は、社会主義批判にうってつけであった」(27)、「国家的な公文書から読みとれるような国民国家の歴史」(40)。

↓

民衆史、心性史（アナール学派）

土肥昭夫『日本ポロテスタント・キリスト教史論』教文館、1987年。

４．トレルチ

・批判（Kritik）　・類推（Analogie）　・相互作用（Wechselwirkung）あるいは相関（Korrelation）

「歴史的方法、歴史的思考法、歴史的感覚」「真の近代的歴史」

「第一は歴史批判にたいする原理的習熟であり、第二に類推の意味であり、第三はあらゆる歴史的事象間に生ずる連関がそれである。」(10)

「蓋然性の判断」(10)

「批判を始めて可能にする方法は、類推を適用すること」、「類推の全能とは、あらゆる歴史的出来事の原則的同質性を含むものである」、「聖書批評自体もまた諸伝承の類推によって成り立っている。」(11)

「歴史的生のあらゆる現象の相互作用」、「すべての出来事が恒常的な相互連関のなかにあり、全体も個体も互いに関連し一つの事象が他のものと関係しつつ、必然的に潮流を形づくることになるのである」、「われわれ自身の追体験能力」(12)

５．パネンベルク

・「トレルチによれば歴史的批判は、「すべての歴史的出来事の原理的同質性」を含む「類比の適用」に基づき、また、歴史的には普遍的な相関関係、「精神的・歴史的生のあらゆる現象の相互作用」があるという前提に基づいている。」(54)、「原理的同質性」、「あら

ゆる出来事は同質性を持つはずであるという要請」、「類比の持っている認識の力は、まさしく類比が非同質的なもののなかに同質的なものを見ることを教えるという点に基づく」(59)。

↓

方法論的現在中心主義＝歴史的思惟の解釈学的構造

制度的再帰性における歴史学・歴史研究

（２）近代聖書学、イエス研究をめぐって

１．パネンベルク「聖書原理の危機」(1963 年の講演)

「テキストの思想世界と現代の思想世界との隔たり」、「聖書の諸文書は矛盾なく内容的に一致しているという意味での古い聖書正典(der biblische Kanon)の概念は、崩壊し去った。」(13)

「イエスの歴史と使徒たちのキリスト教使信との関連を視野から失ってしまった。」(14)

「事実と意味、史実とケリュグマ、イエスの歴史とそれに関する新約聖書の多様な証言、これらの間に断絶があることが現代の神学の問題状況の一方の面の特徴となっている。」(15)

「伝承された種々のテキストとわれわれが生きている現在との解釈学的差異は、その両者を結合する歴史を構想することによって保持されねばならず、かつまた止揚されねばならない」、「普遍史の問題」(19)、「包括的な歴史の神学の意味での神学の普遍性を更新するように押し迫ってくる。」(21)

２．19 世紀におけるイエス伝研究とその挫折（シュヴァイツァーの総括）→懐疑主義

・イエスは初期ユダヤ教の超自然的終末論的メシア王国待望に生きた人物、従来の倫理主義的イエス観とは異なるイエス像。徹底的終末論（第 15 章～第 21 章、邦訳では中巻）

・先行する 70 人の研究者のイエス伝研究を取りあげる(ライマールスからヴレーデまで)。

・「第 25 章　結論的考察」

「否定神学について喜んで語る人々は、イエス伝研究の成果を顧ることに、困難を感じない。[彼らにとっては]それは否定的なものである。メシアとして出現し、神の国の倫理性を宣教し、天国を地上に創始し、そのわざに神聖さを与えるために死んだナザレのイエスは、けっして実在はしなかった。それは、合理主義によって見取図を書かれたり、自由主義によって生気を与えられたり、近代的神学によって歴史的な衣服を着せられたりした一つの形成物である。この像は外部からは破壊されなかった。それはそれ自体の内部において、次から次へと浮かび上がってきた事実的史実的諸問題によって崩壊させられ、揺がされ、分裂させられた。」(304)

「合理主義神学や、自由主義神学や、近代的神学が築きあげたキリスト教の史的基礎は、もはや存在しない。しかしそのことは、キリスト教がそのために史的基礎を喪失したことを意味するものではない。史的神学が遂行しなければならぬと信じ、しかも完成に近づいた瞬間に粉砕されるのを見た研究は、あらゆる史的認識と弁明から独立の、真の、不動の史的基礎の煉瓦装飾にすぎない。というのは、この史的基礎はまさに現存しているからである。イエスはわれわれの時代にとっても、存在するあるものである。なぜなら、強力な霊的な流れが彼から発して、われわれの時代をも貫流しているからである。この事実は史的認識によって揺がされることもなければ、確立されることもないのである。」(395-306)

↓

では、聖書学の存在意義はないか。

３．ブルトマン『イエス』(未来社)

「人間と歴史の関係は、自然との関係とは違ったものなのだ」、「客観的自然観察があるという意味での客観的歴史観察はありえない」(7)、「叙述はただ歴史との絶えざる対話でしかあり得ない。」(8)

「方法の主観性」(9)
「以下の叙述は、普通の意味での客観性を要求し得ないとしても、他の意味では大いに客観的なのである。それはつまり評価を与えることを断念している」、「以下の叙述には、イエスを偉人や天才や英雄にするような言い回しは全く欠けている。」(11)
「イエスの「人となり」に就いての興味も排除されている」(12)、「私個人としては、イエスは自分をメシアと考えなかったという意見である」、「それは結局のところ、この問題については確かな事は何も言えないからではなく、むしろこの問題は副次的な事柄だと思うからである。」(13)
「その意志したところは、実際、一連のまとまった命題や思想として、教説としてしか再現され得ない」、「このものは事実ただイエスの教説としてのみ捉えられ得るのである。」(14)
「思想というとき、それは時の中に生きている人間の具体的状況と切り離せないものとして理解されている。すなわちそれは、動きと不確実性と決断の中にある、自身の実存の解釈なのである。」(15)
「その「教説」、その宣教なのである」、「実際さしあたりは教団の宣教なのである」(16)、「伝承の最古の層の中にある思想の複合体が私達の叙述の対象だからである。」(17)
４．伝承史：イエス→→断片的な口承伝承（弟子たち）→収集・文書化→編集
・現存のテキストから最古層へ遡及し再構成する。弟子集団＝共同体における伝承の法則性の確定→逆算（様式批判）
・編集者の意図の解明（編集批判）

（３）イエスと神の国、イエス・ルネサンス
１．キリスト教神学と同様に、聖書学においても、「イエス」は常に研究者の中心的な関心を占めてきた。→歴史的イエスの探求、「神の国」「終末論」の問題。
２．「イエス研究／終末論」の変遷
1) 19 世紀：近代聖書学の確立期、イエス伝研究、市民社会の倫理の教師イエス
2) 19 世紀末～ 20 世紀初頭：黙示的終末論の再発見→古代の黙示的終末論の宗教家イエス
3) 20 世紀聖書学のパラダイムの浸透：弁証法神学、モルトマンやパネンベルク
4) 1980 年代以降：20 世紀の聖書学のパラダイムの崩壊と新しいイエス探究、黙示的終末思想に基づく宗教者イエスという理解の相対化、知恵の教師イエス。
３．現代聖書学の動向から
1980 年代以降、現代聖書学における新しい動向を指摘した。つまり、20 世紀の聖書学のパラダイム（研究者のコンセンサス）である、「イエスの神の国＝黙示的終末論」という図式の解体である。それによって、現在「イエスの神の国」理解をめぐっては、様々な議論が展開されている。その内の有力な一つの学説が、「知恵の教師イエス」論である。
1) Marcus J. Borg,
Jesus in Contemporary Scholarship, Trinity Press International 1994
Conflicht, Holiness and Politics in the Teaching of Jesus, Trinity Press 1984
2) John Dominic Crossan:
The Historical Jesus. The Life of a Mediterranean Jewish Peasant, HarperSanFrancisco 1991
13. Magic and Meal, pp.303-353
My wager is that magic and meal or miracle and table constitutes such a conjunction and that it is the heart of Jesus' program. (304)
Jesus. A Revolutionary Biography, HarperSanFrancisco 1995
（ジョン・ドミニク・クロッサン『イエス　あるユダヤ人貧農の革命的生涯』新教出版社）
４．知恵の教師イエス

キリスト教に限らず、宗教思想において、知恵思想は中心的な思想の一つである。それは、旧約聖書における知恵文学の存在が示すとおりである――聖書の知恵文学は、古代ユダヤ社会の置かれた国際状況を反映しているが、伝統的な共同体の知恵という面と国際的グローバルな知恵という面とを有している――。

クロッサンが指摘するように、知恵には、慣習的知恵（既存の秩序を肯定）、転換的知恵（既存の秩序の転換・批判）の二つの類型が存在するが、イエスの宗教運動に顕著な知恵思想は、転換的知恵と言える。

慣習的知恵：「父祖の知恵」、伝統的社会の中でそのメンバーとして適切に（＝幸福に）生きるための知恵。共同体の秩序を前提とする。因果応報説はその中心。
→　イデオロギー

転換的知恵：古い秩序を転換し、罪の秩序に対して人間性の回復を可能にする新しい秩序のヴィジョンをもたらす知恵。既存の秩序を批判的に相対化する。安息日批判などはその典型。
→　ユートピア、既存の秩序における既得権者＝権力から見て危険思想
→　十字架

５．知恵から終末論を再解釈する

転換的知恵の思想から、「神の国」を理解することができるとすれば、人間性の回復を可能にする新しい秩序についての知恵という観点から、終末思想をその一つの表現形態として位置付けることが必要になる。知恵と終末との関係理解が、現代聖書学の中心問題の一つといえる。

（４）イエスと癒し

１．＜健康・病＞問題群

Paul Tillich, The Relation of Religion and Health 1946,
in:Perry LeFevre（ed.）, *The Meaning of Health. Essays in Existentialism, Psychoanalysis, and Religion*, Exploration Press　1984　pp.16-52
Ｐ．ティリッヒ『宗教と心理学の対話　人間精神および健康の神学的意味』教文館、2009年。

In asking this question, we do not turn to the modern theological doctrines of salvation for an answer. They have mostly lost the original power of the idea of salvation, its cosmic meaning which includes nature, man as a whole, and society. Especially in modern Protestantism, salvation, and many related concepts such as regeneration, redemption, eternal life, are interpreted as descriptions of the spiritual situation of the individual man, in which a spetial stress is laid on his moral transformation and the continuation of his personal life after death. But for biblical and early Christian thinking, salvation is basically a cosmic event: the *world* is saved.　(16)

When salvation has cosmic signifcance, healing is not only included in it, but *salvation can be described as the act of "cosmic healing."*

Salvation is basically and essentially healing, the re-establishment of a whole that was broken, disrupted, disintegrated.　(17)

The cosmic disease is cosmic guilt.　(19)

The savior is the healer. Jesus calls himself a physician. The power of the salvation is based on their cosmic significance, that is, on the fact that they represent the whole which they are supposed to bring back to its lost wholeness. This implies that they are divine and cosmic figures, divine, implying centralized unity and indestructible control over themselves and things, cosmic, implying their all-embracing universality. Yet the saviors are also human, because in man the cosmic is united and "son of man," the god "anthropos," the "god-man," etc.　(21)

２．*The Meaning of Health*, in: Paul Tillich. MainWorks 2, de Gruyter 1990　pp.345-352
Healing, Separated and United

３．イエスの奇跡物語（治療奇跡）
　イエスは病の治癒なしに、病の癒しを行ったとは言えないか？
　奇跡テキストはいかに読まれるべきか　→　ふさわしい問いとは
４．＜聖書学的に奇跡物語をどのように解釈するか＞
・様式批判（ブルトマン）：イエス運動あるいはキリスト教共同体内部（＋同時代のユダヤ教）
・編集批判から文学社会学（テキストと社会との相関関係・相互連関）
　　大貫隆　『福音書と文学社会学』（岩波書店）
・新しい新約研究の動向：方法論の拡張
　　言語そのものへ：言語行為の諸機能、レトリックの理解
　　方法論の総合化（歴史的批判的方法を超えて）：
５．悪霊に取りつかれたゲラサ人をいやす（マルコ）
5:1 一行は、湖の向こう岸にあるゲラサ人の地方に着いた。2 イエスが舟から上がられるとすぐに、汚れた霊に取りつかれた人が墓場からやって来た。3 この人は墓場を住まいとしており、もはやだれも、鎖を用いてさえつなぎとめておくことはできなかった。4 これまでにも度々足枷や鎖で縛られたが、鎖は引きちぎり足枷は砕いてしまい、だれも彼を縛っておくことはできなかったのである。5 彼は昼も夜も墓場や山で叫んだり、石で自分を打ちたたいたりしていた。6 イエスを遠くから見ると、走り寄ってひれ伏し、7 大声で叫んだ。「いと高き神の子イエス、かまわないでくれ。後生だから、苦しめないでほしい。」8 イエスが、「汚れた霊、この人から出て行け」と言われたからである。9 そこで、イエスが、「名は何というのか」とお尋ねになると、「名はレギオン。大勢だから」と言った。10 そして、自分たちをこの地方から追い出さないようにと、イエスにしきりに願った。11 ところで、その辺りの山で豚の大群がえさをあさっていた。12 汚れた霊どもはイエスに、「豚の中に送り込み、乗り移らせてくれ」と願った。13　イエスがお許しになったので、汚れた霊どもは出て、豚の中に入った。すると、二千匹ほどの豚の群れが崖を下って湖になだれ込み、湖の中で次々とおぼれ死んだ。14　豚飼いたちは逃げ出し、町や村にこのことを知らせた。人々は何が起こったのかと見に来た。15 彼らはイエスのところに来ると、レギオンに取りつかれていた人が服を着、正気になって座っているのを見て、恐ろしくなった。16　成り行きを見ていた人たちは、悪霊に取りつかれた人の身に起こったことと豚のことを人々に語った。17　そこで、人々はイエスにその地方から出て行ってもらいたいと言いだした。18　イエスが舟に乗られると、悪霊に取りつかれていた人が、一緒に行きたいと願った。19 イエスはそれを許さないで、こう言われた。「自分の家に帰りなさい。そして身内の人に、主があなたを憐れみ、あなたにしてくださったことをことごとく知らせなさい。」
６．荒井　献『問いかけるイエス　福音書をどう読み解くか』NHK出版、1994年。
　　「第一五講　「自分の家に帰りなさい」－「悪霊に取りつかれたゲラサ人」のいやし　マルコ五・一－二〇」　190-202 頁
　・奇跡物語の最古層、帰還命令→「癒やし」とは何か、その社会的次元
　・荒井献の新約聖書学のポイントの一つ
　　『イエスのその時代』（岩波新書　1974年）
　　・イエスにおける「民衆の視座」（民衆と共にあるイエスの振る舞い）と「相対化の視座」（神は相対化の視座として機能する）の明確化。「民衆と」「権力に」。
　　・奇跡物語伝承の様式史法則　→　「理念型」の再構成
７．ポイント　→　医療人類学
・疾病（disease）：身体的、心的
　　基本的に特定の次元に限定
　病（illness）：精神的・宗教的を含む全人格的態度、複数の次元が複合的に関与する

・奇跡は物理的現実である前に社会的現実である
　　癒しの社会的次元：関係性の回復という奇跡
　　和解のない世界、にもかかわらず
　　驚くべき出来事＝恩恵・贈与

＜参考文献＞

１．『聖書講座』（第一、二、三、四巻）日本基督教団出版局、1965 年。
第四巻：山谷省吾「聖書解釈の歴史（十九世紀まで)」「宗教史学派の聖書解釈」
２．P.シュトゥールマッハー『新約聖書解釈学』日本基督教団出版局。
３．出村彰・宮谷宣史編『聖書解釈の歴史　新約聖書から宗教改革まで』日本基督教団出版局、1986年。
４．ゲオルグ　G.　イッガース『ヨーロッパ歴史学の新潮流』晃洋書房。
５．トレルチ「神学における歴史的方法と教義的方法について」、『トレルチ著作集２』ヨルダン社。
６．パネンベルク『組織神学の根本問題』日本基督教団出版局。
７．A．シュヴァイツァー『シュヴァイツァー著作集』白水社。
第十七、十八、十九巻『イエス伝研究史　上中下』（遠藤彰、森田雄三郎訳）
・賀川豊彦『基督伝論争史』警醒社、1913年。
第一篇がシュヴァイツァーの『イエス伝研究史』の抄訳。
８．波平恵美子『医療人類学入門』朝日選書。
９．エドガー・V・マックナイト『様式史とは何か』ヨルダン社。
10. ノーマン・ペリン『編集史とは何か』ヨルダン社。
11. ダニエル・パット『構造主義的聖書釈義と何か』ヨルダン社。
12. 芦名定道・小原克博『キリスト教と現代――終末思想の歴史的展開』世界思想社。